

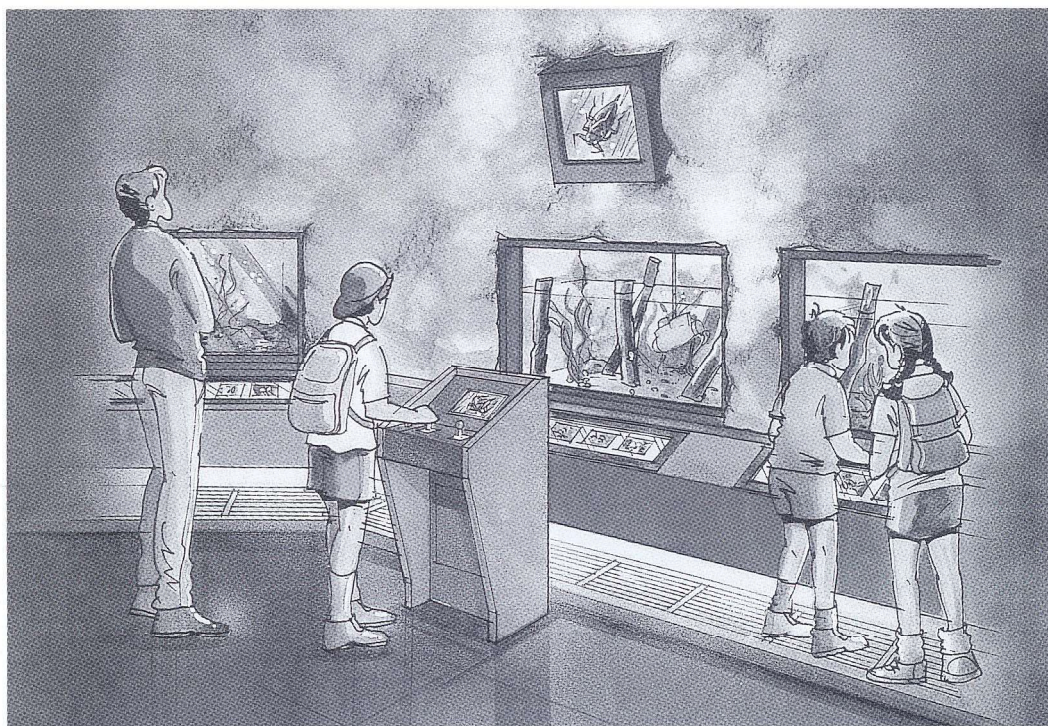
橿原市昆虫館だより

GONTA

(通巻 38 号)

Vol.10 No.2

はる 春だ! へん 変身! こん 昆虫館!



11回目の春を迎え、生態展示がグ〜ンとパワーアップ 新参加型展示「ミクロ探検隊」登場

橿原市昆虫館は平成元年秋のオープン以来、11回目の春を迎えました。この間、放蝶温室へのハチドリの導入や、ミツバチの巣内映像の展示など、展示に関しても、わずかずつではありますが、前進してきました。

そして、この春、昆虫館の生態展示室に、初めての本格参加型展示「ミクロ探検隊」が登場しました。

この展示は、生きた虫が入っている生態展示ケースに小型カメラを組み込み、それを操作することで虫に大きく迫れるというもので、コクピットの雰囲気ふんいを醸し出している操作パネルと、壁面のモニターに映像が映ります。

設置台数は陸槽ケースおのおの、水槽ケース各々1台の計2台。カメラは、レンズ径7mm、長さ5cmの超小型高性能カメラで、カブトムシなどが入った陸槽用には「スペースシップ」型の、ゲンゴロウなどが入った水槽用には「サブマリン」型の造形が施され、楽しさを演出します。

来館者が、遊び感覚でカメラを操作していくうちに、昆虫の世界への興味、関心へと引き込んでいくことをねらっています。

さらにもう一つ。この「ミクロ探検隊」には、操作パネルのボタンを押すことにより、飼育室にいる職員と対話ができる「応答システム」が組み込まれています。

昆虫に関する質問等に答える職員の顔が、操作パネル内のモニターに映るようになっており、カメラの組み込まれたケース内の虫に関することであれば、カメラの映像を使いながら、質問することもできます。

ただし、午後は職員が対応できないことも多いので、質問のある方は、午前中がねらい目かも…。

いずれにしても、全国的にも新しい展示の試みですので、ぜひ一度試してみてください。

(木村)

せつかちなヒラタクワガタ

みなさんは、クワガタムシがどれくらいの時間をかけて、卵から成虫になるかご存じでしょうか。クワガタムシとともに人気者のカブトムシの場合は、夏の終わりに産みつけられた卵が2週間ほどで孵化し、幼虫のままで冬を越します。そして、次の年の5月から6月頃に蛹になり、約1ヶ月後に成虫になって野外での活動をはじめます。

しかし、カブトムシのこのような一生(ライフサイクル)に対して、クワガタムシのライフサイクルはもっと長いものが多く、幼虫の期間だけで1年かかるものや、2年以上かかるものもあります。これはクワガタムシの種類の違いによるものもありますが、それだけではなく卵が産みつけられた時期や、幼虫が育つときの気候、育つ場所や食べ物などによって影響を受けると言われています。そして、クワガタムシの多くは夏の終わりに成虫となり、朽ち木の中で冬を越してから、翌年の夏に野外に出てきて活動を開始します。これを1越型といい、幼虫で1年すごしたものを1年1越型、2年すごしたものを2年1越型といいます。ノコギリクワガタやミヤマクワガタなどが1年1越型に、ヒラタクワガタやオオクワガタなどが2年1越型にあたります。(下図)

1年1越型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12(月)
1年目								卵				幼虫
2年目			幼虫						蛹			成虫となり蛹室で越冬
3年目	成虫のまま蛹室で越冬											野外活動

2年2越型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12(月)
1年目								卵				幼虫
2年目				幼虫								
3年目			幼虫						蛹			成虫となり蛹室で越冬
4年目	成虫のまま蛹室で越冬											野外活動

ところでクワガタムシのライフサイクルについて話をしたのはわけがあります。実は昆虫館で飼育しているヒラタクワガタについての話をしたかったからです。昨年の10月9日にヒラタクワガタの成虫をペアで飼育しているケースのマットを掘り返していたところ、孵化したばかりの幼虫を見つけました。そして、この幼虫を別のケースで飼育し始めました。すると飼育を開始してから約4ヶ月後の2月17日に蛹になりました。そして、それから約3週間後の3月8日に羽化しました。ですからこの個体は孵化してから羽化するまでにわずか5ヶ月しかかかっていないのです。これは2年1越型で成虫にな

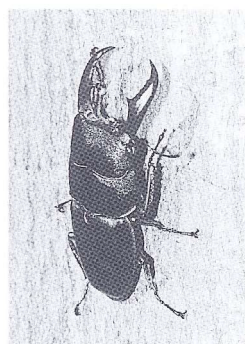
るといわれているヒラタクワガタにとっては驚くべき早さだと思います。ちなみに約3週間という蛹期間はヒラタクワガタにとって平均的な長さと言えるので、幼虫の期間が大幅に縮まったことになります。



▲ヒラタクワガタの蛹(オス)

ではなぜ、こんなにも早く成虫になったのでしょうか。野外でのクワガタムシの幼虫は、倒れた木や立ち枯れた木の腐った部分を食べて成長します。それに対して、昆虫館では幼虫のエサとして主に、クヌギやコナラといった木を細かく砕いた市販のものを使用しています。中でもこの幼虫には添加剤を加えて発酵させたものを使用しました。ですから野外の幼虫が食べている朽ち木より、栄養価が高いエサを食べていました。また、この幼虫はふ化直後からずっと25℃に保たれた恒温器の中で育ちました。そのために野外の幼虫であれば考えられる季節の温度変化による成長の遅れもなく、休まずに成長することが出来たのではないのでしょうか。まだ詳しい事はわかっていないのですが、多分これらの理由からこの個体の成長が早くなったのではないのでしょうか。

ちなみにこの個体は体長約60mmのオスです。成長が早かったわりには大きな個体と言えるのではないのでしょうか。ここで体長を約60mmとしたのは、原稿を書いている4月1日の時点ではまだ蛹室(蛹になるための部屋)から出てきていないために正確な体長を測れないからです。仰向けになったり、うつぶせになったり、横向きになったりと蛹室の中では動いているのですが、一向に外に出てくる気配がありません。もしかして彼の中では今の季節は冬のはじめで、これから冬を越すつもりなのではないのでしょうか。もし、そうだとすると外に出てくるのはこれから半年以上先になりそうです。いったい、いつ外に出てきてくれるのかわかりませんが、首を長くして待っています。



▲ヒラタクワガタの成虫(オス)

(佐々木)

刺さないハチ～ハバチの生活

ハチといえば、「^{おそろ}恐しい」、「毒針で刺される」などコワイ昆虫の代名詞です。ハチの種類は世界中で30万種以上、日本だけでも5千種以上になるといわれています。しかしハチの中でも刺すハチというのは、ほんの一部です。有名なのがアシナガバチやスズメバチで腰がギュッとしまってくびれていますね。これらのハチは、一つの巣を中心に女王バチと働きバチによって営まれ、社会生活をしています。刺すハチというのは、スズメバチ、アシナガバチのグループと、花粉を利用するマルハナバチやミツバチなどの社会生活をするハチだけです。それ以外のハチは毒針をもっていないので危害を加えることはありませんし、しかもすべてのオスバチにはそもそも毒針自身がありません。その理由は後ほど解説することにしてしましましょう。

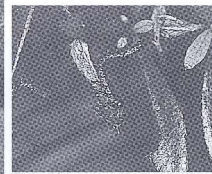
「刺さないハチ」？「刺せないハチ」？

今回は毒針をもたないハバチの仲間の生活です。カタカナでハバチですが、漢字では葉蜂と表します。幼虫はチョウの幼虫のように卵からかえると、植物の葉を食べて成長することから名前がつけられています。ハバチの仲間はハチのトレードマークともいえるべき腰のくびれがありません。ずん胴で、一見するとハエなのかと見間違えうほどです。ハバチのメスは特定の植物の茎や葉に、お尻の先端から産卵管を出して植物繊維の中に卵を産み込みます。卵からかえった幼虫は葉をムシャムシャ食べて成長します。この幼虫は自力で生活できる自立型で、アシナガバチやスズメバチの幼虫のような過保護型ではありません。ハバチの産卵管はノコギリ状になっていて植物の繊維を切り込みながら産卵管を深くくい込ませます。幼虫は^{さなぎ}蛹になる直前になると、土にもぐり土中で部屋をつくり蛹になります。翌年、その植物の若葉が広がる頃になると羽化して、産卵します。

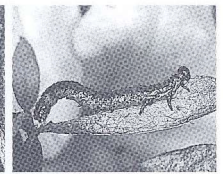
ハバチのグループは、体の形、生活からハチの中でもキバチと共に最も原始的なグループと考えられています。アシナガバチのもつ毒針は、実は産卵管が変化したものなのです。したがって毒針をもっているのはメスバチだけ、すべてのオスバチは毒針をもっていない。ハバチと同じように樹木の茎に産卵するキバチの仲間も同様に原始的なグループで毒針をもちません。

春の野山に出かけてみましょう。山すその道ばた

「刺さないハチの生活」ルリチュウレンジバチ

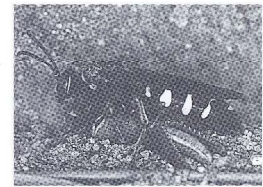


▲孵化した幼虫は集団で成長



◀ツツジの葉に産卵

「毒針はあるが危害を加えない狩りバチ」



▲キアシハナダカバチモドキ
◀ベッコウバチ

には、ノイバラ(野バラ)が新芽を出し、鮮やかな茎や葉を成長させています。よくみると腹部がオレンジ色で頭、胸、翅が黒いハチが逆さになって、茎に産卵管をつき立てて卵を生んでいる現場に出くわすこともあります。野バラの茎の中に生みつけられた卵は、ふ化すると葉を食べて大きくなり、地中で蛹になり翌春野バラが新芽をつける頃羽化してきます。この昆虫はハエではなくハチなのです。しかもハチといっても毒針をもたない刺さないハチです(というより刺せないハチ)。

野山に近い地域にあるツツジの新芽にも、ルリ色のハバチが産卵に訪れます。ルリチュウレンジバチというハバチの仲間です。ルリチュウレンジバチは葉の縁に沿って産卵し、ふ化した幼虫は、若令の間は集団をつくり葉を食べます。お尻を逆立てて集団で葉を食べる様子はユーモラスです。一度観察して下さい。

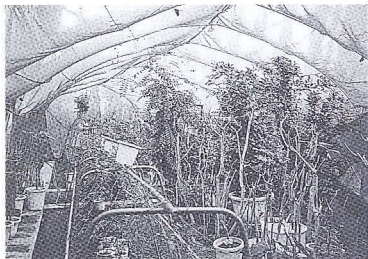
エノキが新芽を開き葉が大きく成長する頃、どこからともなくスズメバチに似た大型のハチが飛んできます。でも腰つきをよく見ると、くびれがありません。2cm近くもある大型のハチですが、ホシアシブトハバチというハバチの仲間なので大丈夫。毒針をもっていない。スズメバチのようにつかみ応えがあり、刺さないので平気です。

ハバチは産卵する植物の成長にあわせてように蛹から羽化して、産卵します。毎年、実にうまく植物の新芽の成長する時期にあうように羽化して飛来するのも不思議ですね。

(中谷)

しいく
飼育ニュース(28)かがや
キラキラ輝くマダラチョウ

皆さんはあまりご存知ないと思いますが、当館の展示温室の隣には、オオゴマダラやツマベニチョウなどの食草を栽培管理している「サブ温室」があります。そこでは幼虫を放し飼いで飼育したり、母蝶を放して採卵等を行っています。実は、その中で放蝶温室では見られないチョウの姿が見られるのです。



▲サブ温室の様子

サブ温室に一步入ると曇りがちの天気の中、花から花へ蜜を求めながら飛び交っている、オスの翅は全体に濃い茶色で、メスはリュウキュウアサギマダラの翅の模様似ています。しかし、一見地味に見えるオスの翅は太陽光線を浴びると、前翅の先から中央にかけて、青紫色にキラキラと輝き、美しさを奪われます。



▲ツマムラサキマダラの成虫

このチョウの名はツマムラサキマダラといい、オオゴマダラと同じマダラチョウ科の仲間で、昨年9月の八重山諸島の採集時に送られてきたチョウで、あまりお日にかかれぬ珍品です。当館スタッフが粘りに粘って、採集してきたチョウです。

ツマムラサキマダラはインド、ネパールから中国南部や台湾などで主に見られ、一昔前までは迷蝶として八重山諸島などでは、ごくまれに台風の風に乗ってきた個体が採集されていました。しかし現在は、迷蝶の一部が食樹のクワ科のガジュマルなどの葉で発生し、世代を繰り返しているようです。

当館では、今までにツマムラサキマダラの飼育を何度か試みたことがありますが、その度ごとく失敗し諦めていました。

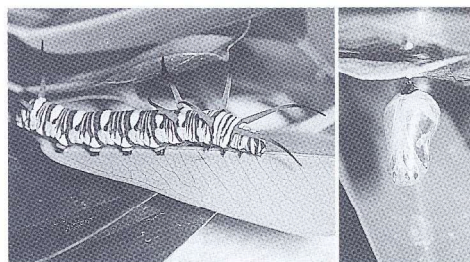
そして、今回こそと送られてきたツマムラサキマ

ダラの交尾済の母蝶を食樹のガジュマルの枝をビンざしにしたものと一緒にケージ内で(25cm×20cm×40cm)採卵を試みました。

しかし、3～4日経っても産卵する気配はなく、今回もダメなのではと思い始めました。そんな時、食樹のガジュマルが地植えで植え付けられている、サブ温室に放してみてもとアドバイスをもらい、サブ温室に最後の望みを賭けて放してみました。

すると1週間後、毎日欠かさずガジュマルの葉の端から端まで見ていたつもりが、新芽で約2cmほどの3令幼虫が葉を食べているではないですか。その他の葉もよく見ると新芽や黄緑色の柔らかい葉にたくさんの食痕があり、1～3令幼虫がおおいそうに葉を食べています。

これがツマムラサキマダラの当館での初めての成功例で、産卵、孵化を確認できたのです。そして、念願のツマムラサキマダラ、飼育の第一歩のはじまりです。



▲ツマムラサキマダラの幼虫(左)と蛹(右)

その後、オオゴマダラの食草でもあるキョウチクトウ科のホウライカガミや、ガガイモ科のガガイモなどの葉にも幼虫が確認されました。幼虫のほとんどは室内に持ち帰り、ガジュマルの柔らかい葉を与え、カップ飼育を行いました。

順調に成長し、金色の蛹になり、蛹化後約9日(25℃下)で成虫に羽化しました。また、卵から蛹まで約15～17日かかり、羽化した成虫はすべてサブ温室に放しました。サブ温室での交尾行動も確認され、現在は4世代目が飛ぶなかで試験飼育を続けています。

最後に当館では、まだツマムラサキマダラについては、わからないことが多く、今後詳しく調べていき、GONTAで紹介していきたいと思っています。

皆さんがこの号を読んでいる頃には、展示温室内にツマムラサキマダラが飛翔しているかも知れません？

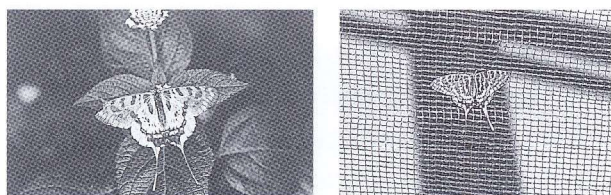
(久米)

しいく 飼育ニュース(29) ホソオチョウの飼育

みなさんは、ホソオチョウというチョウを見たことがありますか？ホソオチョウは、アゲハチョウ科の仲間です。全翅長27～35mmの小型のチョウです。ホソオというだけあって、後翅に細い尾(尾状突起)があるのが特徴です。近畿地方では、限られた場所にしか発生しておらず見る機会がなかなかないと思います。当館では、昨年の9～10月にかけてこのホソオチョウをケージに入れて展示温室内で展示しました。

ホソオチョウは、元々日本国内では全く分布しておらず、隣の国、韓国や中国・沿海州地方に分布しているチョウでした。最初に日本で発生の確認がされたのは、1978年に東京郊外でした。ではなぜ、日本で見られるようになったのでしょうか？実は、人の手によって持ち込まれた個体が野に放たれ、それが自然状態で発生をくり返していると考えられています。成虫の斑紋より韓国が故郷のようです。飛翔力が弱いので、分布はあまり広がらないようですが、関東地方でしか見られなかったのが、さらに人手によって運ばれ、近畿地方の一部でも見られるようになりました。

生息場所は、丘陵地や低山地、河原など明るい草地で幼虫の食草であるウマノスズクサがはえている所で生息しています。



▲ホソオチョウの成虫オス(左)とメス(右)

他のアゲハチョウと比べると、非常にゆるやかでヒラヒラと飛翔しあまり活発ではなく、飛んでもすぐ葉上に止まってしまいます。ですから、展示温室へ放蝶してもすぐ窓ぎわや植物の葉上に止まってしまう目に止まることがないので、昨夏に特製のケージを作って展示しました。オスとメスは、容易に見分けがつきます。オスは、白地に黒の斑紋があり後翅には赤の模様があります。メスは、黄色っぽく黒の斑紋が多くトラの模様のような模様があります。また、春型と夏型によっても少し違ってきます。

卵は乳白色で、産卵後1～2日ぐらいで中央部が褐色になります。食草の葉裏や茎などに産卵します

が、1カ所に数10個の塊で産卵されている場合は、ほとんど受精されていて幼虫が孵化します。しかし、1～2卵と分散して産卵しているとほとんどの場合が未受精卵です。このように産卵されている状態を見て、孵化するのかわからないのかが一目でわかります。卵期間は、25℃で約3日です。



▲ホソオチョウの卵(左)と2令幼虫(右)

幼虫が卵から孵化しても単独で生活することではなく、食草の葉裏にて群れて摂食したり静止し、2～3令まで集合しています。成長するにしたがって分散し、終令になると単独になり葉裏の他に茎にいたりすることもあります。幼虫の体は黒色で背面や側面に突起物があり中でも胸部から出ている1対の長い突起が特徴の一つです。

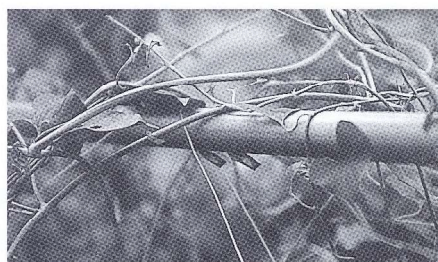
表-1 ホソオチョウの生育日数(25℃/16L 8D)

	卵	1令	2令	3令	4令	終令	蛹
期間(日)	3	3	4	7	4	4	8

25℃で飼育すると幼虫の期間は、表-1のようになりました。1令から蛹になるまでの期間は約22日かかりました。

終令幼虫は、食草の葉裏や茎または近くの木の子などで蛹化します。蛹になる為に体をささえる糸を吐いて体を固定しますが、固定する力が弱いので、ゆすったり風が吹けば、よく糸からはずれ地面に落下してしまいます。蛹の期間は、約8日でした。

今後も、ホソオチョウを飼育できる機会があれば続けていき、また、休眠蛹を作り冬場にも展示できればと思っています。(島田)



▲ホソオチョウの蛹

おんしつ 温室のおじやま虫(8) ^{むし} ワ タ ア ブ ラ ム シ

展示温室には亜熱帯植物を中心にたくさんの植物が植栽してあります。その中でも一番重要な役目をしているのがチョウの蜜源植物です。展示温室の蜜源植物には、ランタナ、ペントス、ハイビスカス、サンタンカ、ブーゲンビレアといった植物があります。今回のおじやま虫君は、アゲハチョウ類やシロチョウ類がよく吸蜜に来るハイビスカスに多く発生します。その名は、ワタアブラムシです。

ワタアブラムシは、世界のアブラムシの仲間の中で最も有名な害虫で、世界共通種と呼ばれるぐらいに代表的な種です。

先程、ハイビスカスに多く発生すると言いましたが、他にもたくさんの植物に発生します。(表-1)

表-1 ワタアブラムシ寄主植物

ツンベルギア・エレクタ
ツンベルギア・グランディフロラ
ベニヒモノキ
ブーゲンビレア
モクセンナ
サンタンカ

ワタアブラムシが発生した植物の症状は、葉がだんだん黄色くなっていき落葉します。新芽や花芽につくと花が咲かなくなり、ひどくなると枯れてしまいます。ハイビスカスでも、葉っぱ一面に発生し、つぼみにまでついて、やがて花を咲かせないまま、つぼみが落ちてしまうことも多くあります。このような状況の中でも、温室内で年間15,000個の花が咲きます。ワタアブラムシの発生時期は、表-2にあるように、だいたい一年を通して発生しています。しかし、夏場になるとワタアブラムシが急に少なくなりほとんど姿が見えません。いったいどういうことなのでしょう。ワタアブラムシも夏バテになって倒れてしまうのでしょうか。

表-2 ワタアブラムシ発生状況 (月)

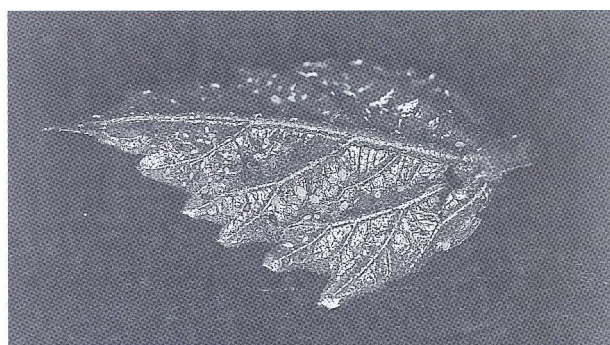
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
○	○	○	○	○	○	—	—	—	○	○	○

○発生している —発生していない

防除方法としては、展示温室内は農薬散布ができないため、自分たちの手でつぶすか、朝夕の散水時に水で洗い流す方法をとっています。他の昆虫館では、薄めた牛乳や薄めたベビーローションを散布して効果はあったようなのですが、悪臭をはじめ様々な問題がおこるため良い方法とは言えないようで

す。生物農薬である天敵の導入も継続して行っていたのですが、アブラムシの天敵であるテントウムシ(ナミテントウ、ナナホシテントウ)は、高温になると夏眠し、なまくらテントウムシになってしまい、何の役にも立ちませんでした。

皆さんは、アブラムシとアリの関係について知っていますか。アブラムシは、甘露^{かんろ}という糖分をふくんだ液体を排出します。アリはこの甘露が好物なので、甘露ほしさにアブラムシに外敵が近づけば攻撃して追い払います。アブラムシとアリとは共生関係があるのです。ですから、温室でも、ワタアブラムシのところにアリがきていて、テントウムシが近づいてきたら追い払っています。テントウムシもおなが空いているためか、結構戦いはするのですが結局あきらめて退散してしまいます。もっと強くなって下さい、テントウムシ君。



アブラムシはこうして見てみると、自分の身を守る術^{すべ}を知っていて結構かしこいおじやま虫ですね。でも、温室にとっておじやま虫には変わりなく、今後もどのように付き合っていくかが大きな課題となっています。今、ひとつ考えていることは、天敵導入をもう一度考え直して、アリに攻撃されるのはある程度しかたがないとして、暑さに負けないテントウムシを探そうと思っています。つまり、なまくらテントウムシにならない南方系のテントウムシの導入を考えているのです。どこまで効果が期待できるかはわかりませんが、やってみる価値はあると思います。いつ導入するかは未定ですが、いつの日か皆さんの目にとまる日がやって来るとおもいますので、その時はテントウムシに「君はなまくらテントウムシ？」と聞いてみて下さい。返事ができないほど忙しく働いていたら、そのテントウムシは、スーパーテントウムシ君です。(山本)

おんしつ

温室だより(4)

ブランド～^{かしはらしこんちゅうかん} 檜原市昆虫館

展示温室では企画展を開催しています(5月14日まで)。企画展と言っても、写真や解説パネルは少なく、温室を飛びまわっているチョウやハチドリを始め、放し飼いのカタツムリ、鉢植えの葉裏にぶら下がっているマダラチョウの蛹、水そうで愛敬をふりまくカエルやトカゲたちが、今回の主役です。温室をゆっくり楽しんでいただこうという趣向です。

そこで、展示するだけでなく、チョットしたイベントをいろいろ実施しています。

春休みには「ハーブティサービス」を行いました。職員の手作り「ハイビスカスティ」です。昨年から、温室で咲いているハイビスカスの花を、毎日せっせと集めて乾燥しました。試しに飲んでみたところ、私達のハーブティは濁っていて、何だか汚らしいのです。困ったなあ、作り方が悪いのかなあ…と話しながら、市販のものをよく見ると、どうやら雄しべ(花粉)を取り除いてあるようです。早速、花を摘んだら雄しべを取って作ってみました。このようにして、段々ハーブティらしくなっていくのです。

ハイビスカスティは、お湯を入れただけなら、暗い紫色です。ところが、ハチミツを入れると、あら不思議。優しいピンク色にかわるのです。昆虫館ではミツバチを飼育しており、昨年採れたハチミツがたっぷりあります。温室育ちのハイビスカスと、昆虫館産のハチミツ。まさに“檜原市昆虫館”ブランドのハーブティ誕生です。

実は今、ハイビスカスティだけでなく、他のハーブもできないかと検討中です。温室に緑や香りを添える植物として、花はチョウたちの蜜源として、更に、昆虫館ブランドのハーブティとして、ハーブが活躍するといいなと考える今日この頃です。(日比)

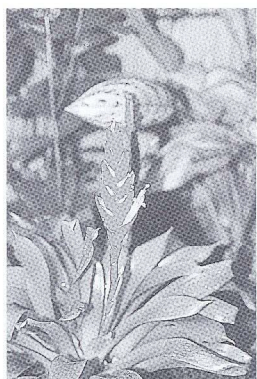


▲ハイビスカス(左)と、ハーブティサービスのようす(右)

おんしつ

温室の植物

オオインコアナナス



現在、昆虫館の展示温室内では、チョウやハチドリはもちろん、いろいろな種類の亜熱帯地方の植物たちを展示しています。みなさんも、園芸店などで一度は見かけたという植物が展示温室内であったと思いますが、今回はその植物たちの中から紹介したいと思います。今回は、見るも変わった花を咲かせる、オオインコアナナスについて紹介します。(以下アナナス)

アナナスは、パイナップル科の一種で、ブラジルが原産地です。この植物は、葉が緑色で光沢があり、濃赤色のきれいな花を咲かすのが特徴で、開花時期は、主に冬から春にかけてです。

アナナスを始め、パイナップル科の植物は、短い茎に多くの葉をたくさんつけるのが特徴であり、また、乾燥に耐える種類が多く、葉の部分は発達して重なり合い、水やりなどでそこに水が貯り、貯水槽

の役割を果たしているのです。また、葉の部分は、表面から水分や栄養分を吸収することができます。それに比べ、根の部分は発育が悪く、土に着生するための働きがしないため、葉が重要な役割を果たしているといっても過言ではないでしょう。

アナナスは、花を約1ヶ月間咲かせ続け、花が咲き終わるまでの間に、株元から子株が発生し、1～2年後には同じように花を咲かせます。しかし、花を咲かせた親株は、しだいに形が悪くなり見苦しくなっていきます。そう、親株は二度と花を咲かすことができないのです。

子株が生育すれば、親株から切り離してやり、鉢などに植え替えて、日陰で管理を行います。直射日光に当たりすぎると葉やけをおこしてしまうのです。また、植え替える時に、子株の根が出ていなくても土に植えてやれば2ヶ月ぐらいで発根してくるのです。

このように、植物にはいろいろな特徴があり、奥が深いところがあります。これからも、みなさんにいろいろな植物を見ていただけるように努力していきたいと思います。(松村)

外国のカブトムシ

「なんで昆虫館には外国の生きた大きなカブトムシがないの？」昆虫館にやってきたカブトムシ好きの少年からしばしば受けた質問である。

カブトムシに限らず、海外の虫は、万一逃げだしたときに、農作物などに害を与える可能性があるという理由から、法律によって、生きた状態で国内に持ち込むことが禁止されている。

実際、カブトムシの仲間といえども、沖縄などには、「台湾カブトムシ」のように、ヤシの木を次々枯らしてしまう種もいるのだ。

しかし、昨年(2000年)の11月より、害虫化の恐れが少ない一部の種について、海外の生きたカブトムシの国内持ち込みが許可された。

そこで、昆虫館でも生態展示の改修を期に、ヘラクレスオオカブトムシや、コーカサスオオカブトムシなどの外国の大型カブトムシを生態展示することにした。

ぜひこの機会に、自然が作り出した、愛らしく美しい、迫力のある最高傑作を、じっくり観察していただきたいと思う。



▲ヘラクレスオオカブトムシ

▼コーカサスオオカブトムシ



ところで、これらのカブトムシはほんの少し前まで、生態写真さえ見ることがまれで、特に子供時分の私にとっては、図鑑の絵だけでその姿を見ることができた、あこがれの虫であった。

その生きた姿を間近に見ることができる今の子供達を羨ましく思う一方、胸の片隅に一抹の寂しさのようなものを覚えるのはなぜだろうか。(木村)

いんぷおめいしょん

▶ 5月 第27回観察教室

カイコからの贈り物

日時：5月21日(日) 午後1時～3時頃

場所：昆虫館会議室 定員：35名

内容：カイコの飼育やマユからの糸繰りなど

対象：小学生以上(小学生は保護者同伴のこと)

参加費：200円(入館料別途) 持物：筆記用具

申込：5月11日(木)午前10時より電話受付、先着順。

▶ 6月 ホタル観察会

今年のホタル観察会は、6月17日(土)の予定です。
くわしくは、昆虫館までおたずね下さい。

▶ 7月 夏の虫観察会

日時：7月23日(日) 午前10時30分～午後3時頃

場所：昆虫館会議室に集合～昆虫館周辺

内容：暑い中で元気に活動している昆虫の野外観察

定員：50名

参加費：無料(要入館料/大人310円・学生210円・小人100円)

持物：弁当・水筒・筆記用具・タオル等

申込：7月13日(木)午前10時より電話受付、先着順。

▶ 開催中！

～5月14日(日)まで

第10回企画展「温室のいきものたち(Ⅱ)」

記念日放蝶サービス
探検マップの貸出し
温室ガイドサービス
放蝶サービス

期間中、いろいろなイベントがあります。
どうぞ、ご参加下さい！

▶ 「檀原市昆虫館友の会」入会のご案内

特典：友の会主催の行事に参加できます。

会報「大和昆虫季」やGONTA等が配布されます。

会員証の提示で、昆虫館に入館できます。

入会：会員には、一般会員(1,500円)と、家族会員(一般会員の家族/500円)とがあります。昆虫館受付にて、随時受け付けています。郵便振替での申込みも可能です。ぜひご入会下さい！(日比)

檀原市昆虫館だより GONTA Vol.10 No.2

2000年(平成12年)4月25日発行 (通巻38号)

編集・発行/檀原市昆虫館

〒634-0024 奈良県檀原市南山町624番地

Tel.0744-24-7246 Fax.0744-24-9128

印刷・製本/株式会社 アイブリコム